Like 42 ツイート 0

連載 山書の散歩道

『人を襲うクマ』（羽根田 治）

連載第3回（著者＝小林千穂／山岳ライター・編集者）

『人を襲うクマ』（山と溪谷社）福岡大学WV部のヒグマ襲撃事故の検証を筆頭に、最近のクマとの遭遇被害の事例を追い、専門家による生態解説など含め、クマ遭遇被害の実態を詳細に明かす

定説を覆すクマの襲撃

みなさんは山でクマに会ったことがあるだろうか？　私は遠くの斜面で見かけたことはあるが、安全圏でのことで、至近距離で見たことは一度もない。山の先輩からは「それだけ山に行っているのにその程度であるはずはない。よっぽど鈍感なんじゃないか？」と笑われたことがある。それもあるかもしれないけれど、単に運がよかっただけのことだと思う。

ちょうど私は今、熊野古道の伊勢路を歩いている。紀伊山地の麓に続く道だ。峠道ではクマの目撃情報が寄せられているところもあり、長距離の山道に入る前に、最近のクマ事情について知っておこうと本書を開いた。

本書は1970年7月に北海道カムイエクウチカウシ山でヒグマが大学生を襲った事故をはじめとし、秩父の猟師のインタビュー、近年のクマ襲撃事件、そしてクマの生態と4つの章で構成されている。

カムイエクウチカウシ山の事例は福岡大生3人が次々とクマに殺されるという凄惨な事故として、50年が経とうとする今も登山者に語り継がれている。私も同じ日高山脈の幌尻岳を登る前に事故の概要を調べ、その悲惨さに背筋が凍りついた。今回、その詳細を改めて読み、特にヒグマが多いといわれる七ツ沼カール付近の稜線で、背丈を越える笹ヤブをかき分けて進む時など、笹に触れる手の先にヒグマがいるかもしれないと、恐怖と戦いながら進んだ経験を思い出した。

私がもっとも注目したのは第三章の「近年のクマ襲撃事故」である。ここでは最近の6つの事故が掲載されている。日ごろ、山の事故を防ぐには、過去の事例からよく学ぶことだと思っているが、本書で紹介されている、実際にクマに襲われた方々の話はリアルでたいへん参考になる。これを読むと「クマは臆病で、刺激しな

下山は薄く積もった雪の地蔵尾根を慎重に下ります。再び行者小屋に立ち寄り、昨日は見えなかった赤岳、横岳、阿弥陀岳に見送られながらの下山となりました。

（文＝増村多賀司／長野県自然保護レンジャー、写真家）

参考書籍

アルペンガイド『八ヶ岳』
https://www.yamakei.co.jp/products/2807013540.html

週刊ヤマケイ 登山地情報

上越・守門岳

すばらしい山岳景観を独占

黎明の空と雪のコントラストが美しい守門岳山頂（写真＝小瀬村 茂）

朝日を受ける大岳（中央）と日本海に向かって伸びる守門岳の影（左奥）（写真＝小瀬村 茂）

11月1日、晴れ

守門（すもん）岳登山口である保久礼へ続く林道は紅葉が真っ盛りで、山全体がブナ林の黄色一色に染まっていました。

車を走らせ保久礼駐車場に着くと、ここは紅葉のピークは過ぎ、落葉が進んでいました。

守門岳へは翌朝未明に山頂をめざしました。登るにつれて落ち葉に混ざって雪が現われ始め、その雪と登山道の薄氷に足をとられ、大幅に時間をオーバーしての登山となりました。

さらに、途中の青雲岳から守門岳までは湿原地帯の木道が大きく傾いて歩きにくく、足もとに注意しながらの油断できない歩きを強いられ苦労しました。雪山登山らしい装備が何もないなか、滑りやすい道を登り詰めようやく着いた守門岳山頂はすっかり雪に覆われていました。そこはすでに秋山の景色ではなく冬山の景色に一変していました。

日の出前の黎明の空はすでに真赤に色づいて、さすがにこの時間は山頂には自分以外誰ひとりおらず、すばらしい山岳景観をひとりじめでした。

（文＝小瀬村茂／山岳写真工房）

参考書籍

新・分県登山ガイド『改訂版 新潟県の山』

https://www.yamakei.co.jp/products/2809023660.html

週刊ヤマケイ 登山地情報

信越・雨飾山

荒菅沢手前の台地上に携帯トイレブースが新設

週刊ヤマケイ

通巻269号　2017年11月9日号

カバー写真＝白銀の妖精。愛らしい姿に似合わずすばしこい（立山室堂にて）

撮影＝伊藤哲哉

株式会社山と溪谷社
〒101-0051東京都千代田区神田神保町1丁目105番地

編集
佐々木 惣

アートディレクター
松澤政昭

SSデザイン
塚本由紀(T&Co.)

技術サポート
福浦一広、金沢克彦

プロデューサー
萩原浩司

©2017 All rights reserved. Yama-Kei Publishers Co., Ltd.